

二〇一五年度 入学試験問題

文学部A方式I日程・経営学部A方式I日程・人間環境学部A方式・GIS(グローバル教養学部)A方式

二限 国 語 (60分)

〈注意事項〉

- 一 試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないこと。
- 二 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
- 三 志望学部・学科によって解答する問題が決まっている。問題に指示されている通りに解答すること。指定されていない問題を解答した場合、採点の対象としないので注意すること。
- 四 マークシート解答方法については下記の注意事項を読みなす。

マークシート解答方法についての注意

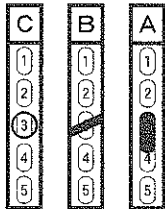
マークシート解答では、鉛筆でマークしたものを機械が直接読みとって採点する。したがって、解答はHBの黒鉛筆でマークすること(万年筆、ボールペン、シャープペンシルなどは使用しないこと)。

一 記入例 解答を3にマークする場合。

(一) 正しいマークの例



(二) 悪いマークの例



枠外にはみださないこと。

○でかこまないこと。

- 二 解答を訂正する場合は、消しゴムでよく消してから、あらためてマークすること。
- 三 解答用紙をよごしたり、折りまげたりしないこと。
- 四 問題に指定された数よりも多くマークしないこと。

〔二〕 つぎの各問いに答えよ。

問一 つぎの各文の傍線部について、言葉の用法や文法からみて正しいものには a、誤っているものには b の記号を、解答欄にマークせよ。

ア 捨てられた子犬が雨の中でふるえているのを見て、惻隱の情を禁じ得ない。

イ 四方を敵に包囲された軍勢は、正面突破という乾坤一擲の賭けに出た。

ウ 新型インフルエンザは猛威を振るい、瞬く間に日本中に濫觴した。

エ 平素から腰の低い彼は、年下の者にも懇懃な態度で接している。

オ 幼いころから家臣にかしずいてきた殿様は、わがまま放題に育った。

問二 つぎの各文学作品の作者を後の選択肢の中からそれぞれ一つ選び、解答欄の記号をマークせよ。

1 歌よみに与ふる書

ア 北村透谷

イ 斎藤茂吉

ウ 与謝野晶子

エ 正岡子規

オ 上田敏

2 破戒

ア 志賀直哉

イ 島崎藤村

ウ 田山花袋

エ 武者小路実篤

オ 小林多喜二

〔二〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

自然はある意味では、現代文化の寵児となりつつあるのかもしれない。アウトドアライフ、バードウォッチング、一坪農園、^Aケイリユウ釣り。自然はいまやヒマとカネのある人間によって再発見され、喰い荒されている。自然と対立して極限的な人工世界をつくりあげた人類は、こんどは車という機動力を駆使して、自然へ向けて逆流を開始したのだ。

だが、このように再発見され再び価値づけられた自然は、かつて人間がその中で生きざるをえなかった自然とは異なり、文明化された人間のホビーの対象でしかない。自然が都市住民の流行のホビーでありうるのは、あくまでテクノロジーカルな生活基盤と装備があればこそなのである。もちろん、このようなホビーとしての自然再発見は、森や川の破壊に歯止めをかける役割を果たすかもしれないという点では、一定の積極的意義を認めてもよいものである。だが、こういう自然との「親しみ」かたは、文明論的な一兆候ではあっても、けっしてわれわれ人間を自然との正しい関係へ導くものではあるまい。

人類は初期文明の成立と同時に、大地に円を描いて、そこに自然の威力の及ばない人間の占守空間として宣言する習性を身につけた。それはすなわち、自然から自立する意識の成立でもあった。人類がみずから意識として自然から弁別し、それ自身の根拠において存立する意識¹が、対象としての自然を工作し操作するという、精神対自然、文化対自然の図式が成立したのは、もちろん根拠あることといわねばならない。大地の重力から解放されて天空の高みへ飛翔したいというのは、イカルス以来の人性である。このような意識の自然からの自立が西ヨーロッパにおいてのみ徹底的に遂行されたというのは、興味ある一個の論題だろう。だが、このような精神の自然離脱は近代テクノロジーという裏づけを得て、その歴史的出自を超え、いまや世界を主導する普遍的指向となるにいたっている。

しかし、意識がそれ自身存立するものとして絶対化しつつ自然を対象化するありかたは、意識の気づきの過程としては、それ自体あくまで歴史的で過渡的なものにすぎない。意識の気づきの力学は、そういう意識の自己絶対化をのりこえて、^{*}実在系における意識の総体的な位相の気づきにまで至らずにはやまない。意識による自然の対象化とは、この実在系における歴史的

出来ごととしてみるならば、自然²による自然自身の気づきにほかならなかった。

人間が物質進化の産物であり、その意味で人間もまた自然にほかならぬことはおよそ否認しがたい事実である。だが、多くの人びとは、人間の肉体は自然として承認しながら、精神もまた自然の一分出型であるとは認めがたらない。しかし精神と肉体は、分離しがたい生命的統一を、区分というベンギ的な初級論理によって解体したときに生ずる仮設概念にすぎず、実在するのは、精神とは肉体であり肉体とは精神であるような分割すべからざる生命現象なのである。そしてその生命が、地球という実在系の一構成因であり、しかも進化による地球そのものの分出的表現型である以上、人間の精神とはまさに自然そのものの働きにほかならない。

分析的区分的な認識枠組は、生物を地球という天体と区別し、さらに人間以外の生物を自然に組みいれて人間 \parallel 精神と弁別する。なるほど、それは認識のためのひとつの便法ではある。だが、たかが便法にすぎないもののために、実在の眞のありかたへの眼を曇らせてはなるまい。人間は地球という乗物に、あたかもひとが車や船に乗っかるように乗っているのではない。このようにイメージされたときの地球とは、まさに地殻的構造物としての天体そのものである。そしてその構造物の上に寄生しているもろもろの生命は、偶然が人間のためにしつらえてくれた調度なのである。地球・生命・精神をこのように分断して、部屋という構造物と、その中にしつらえられた備品・裝飾などの調度と、その中に住む人間のようにイメージして来た近代的な地球観には、まことに無邪気な人間中心主義的刻印がしるされている。この鏡に映った実在の像は奇天烈³に歪曲⁴されているのだ。

しかし、ビッグバン以来の宇宙の創成を思いみれば、生命にせよ精神にせよ、いずれも地球という一実在系のメタモルフォーズにほかならず、人間 \parallel 精神はとりもなおさず自然 \parallel 地球の分出的表現型なのだ。

われわれは文化を形成し意識そのものと化すことによって、自己を自然とは別なものかと自覚するにいたったけれども、じつはわれわれ自身が自然の一部なのであり、意識は自然自身、地球自身の働きの一局面なのだ。われわれの自然認知・自然の対象化は、自然による自然の認知であり、対象化であったのだ。このことの確認は何をもたらすか。われわれ人間の活動環

境としての自然についての、改変されたよりの確な認識をもたらす。

自然は人間の生存・活動の環境であり、利用すべき資源の一大倉庫でありうるけれども、人間にとって自然がもつ本源的意味はそれ以前のところにある。

山河はそして草木は、そして空とそこを往き来する雲と風は、なぜわたしたちにとって美しくここちよいのだろうか。それはわたしたちの感性が、ということは全神経系が、そういういわゆる自然を美しくここちよいものとして感受するように、系統発生上、形成されて来たことを意味する。日本人と西洋人とで花の美しさが異なるというのは、歴史的な修飾^{モテフレイ}の問題にほかならず、自然を美しいと見る感性が系統発生的にビルトインされていることへの反論にはならない。

つまり、われわれの心は山河にかたどられているのである。自然は人間にとって資源である以前に、人間が人間として形成される場なのである。山や川や風や雨や、さらにはその中で生をいとなむ花や木や鳥やけもののイメージなしには、人間にはいかなる思考も想像も不可能であつたらう。なぜか。その理屈はかんたんで、人間の意識は、宇宙船で飛来して宇宙空間から地上を観察しているような純粹理性ではなく、地球という實在系の一構成因として、系全体との関係^{||}相互浸透のうちにあらしめられているからである。人間は自然の結節点なのであり、それゆえにこそ己れのうちに全コスモスを映し出しているのだ。人間が古代からさまざまなシンボルを駆使して来た理由はここに求められる。自然はわれわれの心の生みの親であるというばかりでない。われわれの心の拠つて立つべき範型なのである。

われわれは意識を確立することによって自然をコントロールして来た。だからこそ、コントロールしてはならない。いやコントロールすることが不可能な實在を自覚することが必要なのだ。なぜなら、人工の世界は自然にもとづいてのみ成り立ちうるからである。人間が意識にもとづいて、反自然的にさえみえる精神的冒険にのりだして来たのは、彼の光栄である。だが、それは自然という實在あつての話だったのだ。しかもこの自然というのは歴史的な形成物である。その歴史的生成の基盤なしには、人間は反自然的であることすらできない。いわゆる二次林を自然でないという論者は、自然ということをか思いちがえているのだ。

都市という人工の世界の典型をとつてさえ、それがいかに自然をかたどつてつくられて来たことか、われわれはおどろかすにはおれない。いまはやりの都市論は、ようやく都市のカオス性・迷路性にふたたび気づいたようである。なぜ都市は、多様で複雑な要素が微妙にいりくんだ世界であらねばならないのか。われわれはそこに自然の編成原理の反映を見出すだろう。造成された杉山は自然にあるものでもなければ美しくもない。自然は多様で複雑であればこそ美しいのだ。

わたしたちは今日、自然などというものはない、人間は徹頭徹尾文化的産物であつて、自然と切れているからこそ人間である、といった具合の言説にとりかこまれていく。こういう議論には、その出現の歴史的な根拠も意義もあるのだが、今日の反自然論はいちじるしくトリッキーになっているのが特徴である。ものはいよいよということがある。だが同時に、どういおうとも動かぬ真実というものはある。今日の知的言説は小林秀雄風にいえば「様々な意匠」に血道をあげて、動かぬ真実を軽侮することをもつて流行と心得ているらしい。だが、われわれの文明の行くすえは、自然と人間の関係を再設定すること、いかえれば自然のなかでの人間の位置についてより正確な見取り図を構成することの成否にかかっていると見えよう。いま行われている議論は一切過渡期の言説である。自然についてさえ、それは往々にして大局を離れようとする。私は明るい望みはもっていない。見通しは暗いとさえいえる。しかし、真実は見ようとする意志があれば見うるものとして、われわれのまえにかけられている。自然は資源の倉庫でもなければホビイの対象でもない。それはヒトがヒトとなる場であり、ヒトの生そのものなのだ。

(渡辺京二「民衆という幻像」より。文章を一部改変した)

【注】

* 実在系

地球上に存在するあらゆるものを統一的に体系化したもの。

* メタモルフォーゼ

Metamorphose (ドイツ語)。変身。変形。変態。

問一 波線部 A、D について、カタカナは漢字に直し、漢字はその読みをひらがなで解答欄に記せ。

問二 傍線部 1「意識の自然からの自立」とは、どのようなことか。最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア 人間が意識によって自然から自立し、自然を価値あるものとして改めて位置づけようとしているということ。
- イ 人間が意識によってみずからを絶対化することで自然から自立し、自然を操作するようになるということ。
- ウ 人間が意識的に自然を対象化することによって自然から自立し、人間として進化を遂げてきたということ。
- エ 人間が意識によって自然から自立し、人間の精神が自然の働きを生み出すと考えるにいたったということ。
- オ 人間が意識的に自然から自立し、みずからと人間以外の生物を自然に組み入れようとしているということ。

問三 傍線部 2「自然」とは、ここでは何を指しているか。最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア 生命
- イ 地球
- ウ 人間
- エ 文化
- オ 宇宙

問四 傍線部 3「その歴史的生成の基盤なしには、人間は反自然的であることすらできない」とあるが、人間が「反自然であることすらできない」ことの例として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア 人間は自然に取り囲まれているために、人工的な建築物によってしか人間の光栄を表すことができない。
- イ 人間は意識によって自然から自立したために、都市を作る際にも多様さや複雑さを意識せざるを得なかった。
- ウ 人間は自然を勝手に操作してきたために、カオス性・迷路性をもった人工的な世界しか作りだせなかった。
- エ 人間は自然によって形成されてきたために、都市をつくる際にも自然の原理を反映させずにはいられない。
- オ 人間は自然を調度として捉えてきたために、自分たちに都合の良い人工的な都市しかつくりだせなかった。

問五 傍線部4「それはヒトがヒトとなる場であり、ヒトの生そのものなのだ」とあるが、ここで人間を「ヒト」と表記しているのはなぜか。最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア ヒトが人間として、地球という天体に乗って自然を眺める純粹理性であるということを確認するため。

イ ヒトがみずから人間と区別して、自然を対象化してきた唯一の生物であることを批判的に表現するため。

ウ ヒトとは何かという分析的な問題を、自然を操作してきた人間存在と切りはなして改めて問おうとしているため。

エ 人間は自然を操作できる高度な知性を持つ存在だが、ヒトは単に動物の一種であるに過ぎないことを強調するため。

オ 意識によつてみずからと自然を弁別してきた人間を、自然の一部であるヒトという生物として捉えなおそうとするため。

問六 つぎの各文の中から、本文で述べられている筆者の考えと異なつて、いゝものを一つ選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 現在の自然に関する言説が過渡期であるといえるのは、いまだに人間が意識によつて自然を対象化しているためである。

イ 自然が価値あるものとして再発見されるようになったのは、人間が自らを自然の一部として認識し始めたからである。

ウ 人間はみずからを絶対化し、かつ地球や他の生命と弁別したことによつて、自然を都合よく操作しようとしてきた。

エ 人間の自然に対する感性は系統発生的に形成されてきたものであつて、文化によつて形成されたものではない。

オ 人間の心は自然を範型として形成されており、地球や自然と切りはなされて独立に存在するものではない。

問七 二重傍線部「われわれ人間を自然との正しい関係へ導くものではあるまい」とあるが、人間と自然との正しい関係を築くには、どのようなことが必要であると筆者は述べているか。つぎの形式に従つて、四十字以上五十字以内でまとめ、解答欄に記せ。ただし、読点や記号も一字と数える。

こと。

〔三〕 つぎの文章は、建礼門院に仕えた女房による日記的歌集『建礼門院右京大夫集』の一節である。以下の場面を読んで、後の問いに答えよ。

A 頭中将実宗の、常に中宮の御方へ参りて、琵琶弾き、歌うたひ遊びて、時々、「琴弾け」など言はれしを、「ことざましにこそ」とのみ申しして過ぎしに、ある折、文のやうにて、ただかく書きておこせられたり。

A 松風の響きも添へぬひとりごとはさのみつれなき音をや尽くさむ
返し

B 世の常の松風ならばいかばかりあかぬ調べに音もかはさまし

同じ人の、四月御生のころ、藤壺に参りて物語せし折、権亮維盛の通りしを、呼びとめて、「このほどに、いづくにてまれ、心とけて遊ばむと思ふを、かならず申さむ」など言ひ契りて、少将はとく立たれにしが、少し立ちのきて見やらるるほどに、立たれたりし、ふたへの色濃き直衣、指貫、若楓の衣、そのころの単衣、常のことなれど、色ことに見えて、警固の姿、まことに絵物語に言ひ立てたるやうにうつくしく見えしを、中将、「あれがやうなるみざまと、身を思はば、²いかに命も惜しくて、なかなかよしなからむ」など言ひて、

C うらやまし見と見る人のいかばかりなべてあふひを心かくらむ

「ただ今の御心の内も、さぞあらむかし」と言はるれば、物の端に書きてさし出づ。

D なかなか花の姿はよそに見てあふひとまではかけじと思ふ

と言ひたれば、「思しめし放つしも、深き方にて、心清くやある」と笑はれしも、さること、をかしくぞありし。

〔建礼門院右京大夫集〕より

【注】

*中宮 作者が仕えている高倉天皇中宮平徳子(建礼門院)を指す。

*御生 京都の上賀茂神社で、葵祭(あふひまつり)の三日前に行われる神事のこと。

*藤壺 清涼殿の北側にある御殿で、この当時は中宮がいた。

*少将 維盛を指す。

*警固 葵祭の前後数日間、近衛府等の官人たちがその警護にあたることになっていた。

問一 傍線部1「いづくに生まれ、心とけて遊ばむ」を現代語訳し、解答欄に記せ。

問二 傍線部2「いかに命も惜しくて、なかなかよしなからむ」の現代語訳として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄

の記号をマークせよ。

ア どれほど命が惜しくても、よい行いができる人はなかなかいないだろう。

イ どんなに命があつても足りないくらい、きつと楽しく生きられるだろう。

ウ いくら余命が残されていようと、つまらない人生ではあまり意味がないだろう。

エ どんなにか自分の命も惜しくなり、執着心が生まれてかえってよくないだろう。

オ いくら命が惜しいとはいえ、これほど明らかに生きることができようか。

問三 傍線部3「さぞあらむかし」の文法的説明として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア 名詞＋間投助詞＋動詞の已然形＋過去の助動詞の連用形＋終助詞
- イ 副詞＋係助詞＋動詞の終止形＋比況の助動詞の已然形
- ウ 代名詞＋係助詞＋動詞の連体形＋推量の助動詞の連体形
- エ 副詞＋動詞の連用形＋推量の助動詞の終止形＋希望の助動詞の終止形
- オ 副詞＋係助詞＋動詞の未然形＋推量の助動詞の連体形＋終助詞

問四 つぎの文章は和歌A・B・C・Dに関する説明である。空欄にあてはまる最も適切な語句・人物を後の選択肢からそれぞれ選び、解答欄にマークせよ。なお、「」には語句、「」には人物が入る。ただし、同じ選択肢を何度選んでもよい。

AとBは、琴の音を「①」にたとえて詠んだ贈答歌である。Aは実宗からの歌で、上の句の「②」、下の句の「③」は作者が一緒に演奏してくれないことを表している掛詞である。作者は、「琴の演奏を断るのは、自分の能力が「④」の技量よりも劣るからだ」とBで答えている。

Cは「X」の美しさを讃える実宗の和歌で、時節に合った「⑤」を掛詞にし、皆が「X」を恋人にしたがることだろうとうらやましがる内容となっている。Dは、「X」の美しさを「⑥」にたとえつつ、実宗の発言に反論する、作者の和歌である。

〈選択肢〉

語句	ア 松風	イ 響き	ウ ひとりごと	エ さのみ	オ つれなき
	カ 音	キ 尽くさむ	ク 世の常	ケ あかぬ調べ	コ 見と見る人
	サ あふひ	シ 心	ス 花	セ かけじ	
人物	I 作者	II 頭中将実宗	III 中宮	IV 権亮維盛	

問五 和歌Dの内容について、作者は、実宗から傍線部4「心清くやある」と冷やかされるが、それに対して、傍線部5「さること」と納得している。作者は、実宗からどのように冷やかされて、どんなことに気づき、納得したのか。つぎの形式に従って説明した場合、空欄 a b に入る内容をそれぞれ十五字以内でまとめ、解答欄に記せ(本文をそのまま抜き出してはいけない)。なお、読点や記号も一字と数える。

実宗から「a」と冷やかされ、実は、「b」
裏返しであることに気づいた。」「という自分の気持ちは、深い思慕の情の

問六 個人の和歌を集めた私家集をつぎの中から一つ選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア 沙石集 イ 閑吟集 ウ 菟玖波集 エ 金槐和歌集 オ 詞花和歌集

つぎの問題〔四〕は、文学部を志望する受験者のみ解答せよ。

〔四〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ（設問の都合上、返り点・送り仮名を省いた箇所がある）。

昔者田成子遊^{ビテ}於海^ニ而樂^{シム}之^ヲ。号^コ令^{シテ}諸大夫^ニ曰^{ハク}言^フ婦者^ハ死^{セント}顔^{ガン}*。

涿聚^{ソウ}曰^{ハク}君遊^{ビテ}海^ニ而樂^{シム}之^ヲ。奈^ニ人有^ル凶^ク国^ニ者何^カ。君^ハ樂^{シム}之^ヲ、将^ス

安^ン得^{ント}田成子曰^{ハク}寡人^ハ布^キ令^ヲ曰^フ言^フ婦者^ハ死^{セント}。今子犯^{セリト}寡人之令^ヲ。

援^ニ戈^ヲ将^ス擊^ツ之^ヲ。顔涿聚曰^{ハク}今君雖^モ殺^{シテ}二臣^ノ之身^ヲ以^テ三^ニ步^ノ之^ヲ可^ク也。臣^ハ

言^フ為^レ国^ノ非^{ザル}為^レ身^ノ也。延^{ベテ}頸^ヲ而前^ニ曰^{ハク}君擊^テ之^ヲ矣。君乃^チ积^{ナテ}戈^ヲ趣^{ウナガシテ}駕^ヲ

而婦^ヲ至^{ルコト}三日^{ニシテ}而聞^ク下^ニ国人^ニ有^ル中^ニ謀^ル不^ラ内^ニ田成子^ヲ者^上矣。田成子

所^{ヨリ}以^テ遂^ニ有^ル二^ニ齐^ノ国^一者^ハ顔涿聚^ノ力^ニ也。

〔韓非子〕より。文章を一部省略した。

【注】

* 田成子

紀元前五世紀前半の人。田氏は、代々齊の国の大臣の家柄。

* 顔涿聚

賢者と評された人物。

* 寡人

王侯の自称。徳の少ない人という謙遜の意。

問一 傍線部1「奈人有凶国者何」について、つぎの(一)(二)の問いに答えよ。

(一) 書き下し文は、「人の国を凶る者有るを奈何せん」であるが、これに従って、解答欄の文に返り点をつけよ。

(二) 書き下し文の解釈を、つぎの形式に従って、二十字以内で解答欄に記せ。ただし、読点や記号も一字と数える。

国を

問二 空欄

A

に入る語として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 故

イ 非

ウ 不

エ 雖

オ 未

問三 傍線部2「援戈將擊之」のひらがなのみの書き下し文として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア ほことしやうをひきてこれをうつ

イ ほこをひきはたこれをうたん

ウ ほこをひきまさにこれをうたんとす

エ ほこをひきもつてこれをうつ

オ ほこをひきてほとんどこれをうつ

問四 傍線部3「所_レ以_レ遂有_二齊国_一」についての作者の考えとして、最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 齊の国が成立することができたのは、顔涿聚の捨て身の攻撃のおかげである。

イ 田成子が齊の国の実権を掌握できたのは、顔涿聚が身を賭して諫めたからである。

ウ 田成子が齊の国に入らずに命が助かったのは、顔涿聚が危険を予言したからである。

エ 田成子が齊の国を領土に持つことができたのは、顔涿聚が命を賭けた策謀の成果である。

オ 齊の国に謀反が起きなかったのは、顔涿聚が命を犠牲にしてくれたからである。

つぎの問題(五)は、経営学部・人間環境学部・GIS(グローバル教養学部)を志望する受験者のみ解答せよ。

〔五〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

近代日本の教育は大きく二回の「黒船」を体験している。最初は文字通り幕末に浦賀に現われた、ペリー率いる「黒船」である。これを契機として時代は大きく動く。新しい時代はそれまでの人間社会の共同性、とりわけ道徳に重きをおいた教育から、個々の人間の諸能力に着目した教育への転換をうながした。新しい教育観は、個人的な次元では封建身分秩序に閉じこめられてきた個々の日本人を解放して階層上昇の機会を提供する、いわゆる立身出世主義というスローガンを通して日本人に浸透していった。

明治国家は、こうした日本人のエネルギーを新しい産業社会に必要な人材教育に集約していった。近代の産業社会は、国民の能力を縦の学校系列に応じて、それぞれの職種に分配・配置するように教育を組織化した。ある者は国家官僚に、ある者は工場技術者に、またある者は工場労働者に、というように、能力と経済力に即して、上は帝国大学から下は尋常小学校にいたるまで、普く国民の能力を開発できるように学校系列を多様化した。少数の成功者を除いて、どの段階の学校教育を終えたかによって、社会的な位置がほぼ定まるような仕組みにあった。学歴が社会的な成功と結びつけて考えられ、多くの国民に立身出世の幻想を抱かせた。明治以降、今日にいたるまで日本人を教育に追い立てているのはこうしたしくみにある。

また、この時代の「黒船」は幕藩体制の下で地域に閉じこめられていた個々の人間に、日本という国家に所属する国民としての自覚をうながした。

市民革命をへて確立した西洋の近代国家においては、国民はそれぞれの「市民としての権利」を保障されると同時に、「市民としての義務」を担わなければならなかった。日本でも自由民権運動の時代をへて、民権意識の高揚をみたにもかかわらず、真の意味での「市民としての権利」意識は確立せず、したがって「市民としての義務」意識も未成熟な状態のままにおかれた。た

だ、国家が強制するもろもろの義務をなせば宿命的に受けとめ、その見返りとして、能力と経済力に恵まれた少数の日本人には、国家の中枢に近づくことが許された。これが立身出世主義の本質である。

このスローガンによって幕が切つて落とされた明治五年（一八七二）の学制は、フランスの学区制度をとりいれ、アメリカの教育内容をモデルとして出発した。この学区制は、幕府時代の行政単位の解体を目的としていたのであるが、多くの村々には、中世以来の民衆の自治觀念によって培養された「公」觀念が存在した。白装束を身にまとい片手には数珠をもった村の代表が立ち、お上かみに異議を申し立てた江戸時代の村一揆の背景には、こうした「公」觀念があった。それは村人の個人的な「私」とも、幕府や藩の「官」とも結びつくものではなかった。白装束の庄屋は一揆が失敗の時はいうまでもなく、成功しても責任をとつて死罪を免れることはなかった。この精神は後に自由民権運動にも受け継がれることがあったが、農村の解体はこうした「公」觀念をも同時に解体して進行する。

明治国家が教育を通して形成しようとしてきた国民の「公」觀念は、「市民」觀念に結びつかない国家觀念にほかならなかった。日本の近代教育は、こうして個人の対極に国家を置き、「私」を直接「国家」に結びつけようとするものであった。しかし、この個人と国家のあいだには、村の子供を育て、村の青年を鍛えて「一人前」にする村の教育機能や村人相互の扶助組織や、小学校の運営を支える地域の力がかるうじて存続していた。この「公」の組織の多くは戦時中において、大政翼賛会の組織に利用されて「官」制化したものもあったが、庶民の生活の次元においては、「自治」の伝統を脈々と受け継いでいた。こうした伝統が、競争による私利私欲の追求という学校教育の「近代化」に生じる矛盾や葛藤を融和し補完していた。

第二の「黒船」は、第二次世界大戦が終了し、占領軍に国の運命を委ねた昭和二十年（一九四五）に來航した。「黒船」に続いて來日したアメリカ教育使節団は「市民としての権利」を保障し、教育を通して「市民としての義務」を遂行する民主的な国民の形成を要求した。一連の教育の「民主化」は、かつて日本の庶民が維持してきた「村の自治」なるものを、いとも容易に封建の殘滓ざんさいとみなして克服し否定すべき課題とした。個人の権利が何ものにも優先してとらえられるようになった。

かつて日本の子どもたちは、村祭りや地蔵盆などの子どもを中心とした行事において「地域の子ども」として育てられた。地

域が子どもの教育に大きな役割を担っていた。しかし、「宗教の自由」はこうした行事に公費をあてることを拒否する。このようにして伝統行事は脱宗教化され、本来の意味を失っていく。

かくして子どもたちは、地域から個々の家庭に連れ戻された。子どもたちが自力で運営した夏休みのラジオ体操も、地域住民の睡眠を妨害する「騒音」として「告発」され、しだいに消え去っていく。地域の広場は私有地として子どもたちの立ち入りを禁止する。放課後の小学校は管理責任の問題から子どもたちを閉め出してしまふ。

地域から引き離された子どもたちは、つぎには家庭から受験塾に追いやられてしまふ。町や通りから子どもたちの遊び声が消えてしまった。子どもたちにとって寛げる「公共の場」とは、学校でもなく地域でもなく家庭でもない。なぜなら、それらはいずれも人と人が自由に交わる「公共の場」であることをやめてしまったからである。ゲームセンターや深夜のコンビニエンス・ストアで、子どもたちは疑似的な「公共の場」を淋しく体験するのである。子どもたちをこのように追いやったのは何か。私たちは教育問題の所在を学校に閉じこめて論じようとする。教育問題は学校に出現するが、その所在は学校ではない。教育問題を広く社会のなかで解決する姿勢がいま問われている。

子ども文化の中心に位置する漫画や玩具の世界をとってみても、子どもを育てるといふ視点よりも、経済の法則が支配している。漫画の世界は読者層を子どもに限定するよりもヤングアダルトと呼ばれる三十歳代までを想定することによって、発行部数をのばそうとする。男女の関係や、金と暴力が支配する大人の世界が凄まじい勢いで子どもたちの世界を浸蝕してゆく。子どもたちが日常的に影響を受けるテレビにおいても、事情は本質的には変わらない。これらは、表現の自由や言論や出版の自由で正当化されている。しかしこれらは、国家が規制し管理する問題ではない。国民の良識によって淘汰してゆく問題である。

教育の再生は、私たちの社会が新しい「公」観念を形成し、いかに制度化するのにかかっている。日本人が「私民化」し、それを肯定し正当化するために民主主義や人権思想が用いられることに、大きな不安と危機意識を募らせずにはいられない。子どもたちをめぐる凶悪犯罪が多発し、警察や国家の官僚たちの不正を日常的に目にする時代に、³かつて白装束を身にまとい、

命を賭けて権力の不正と戦ったリーダーがいたことを想起しておきたい。

(沖田行司「日本人を作った教育 寺子屋・私塾・藩校」より)

問一 傍線部1「近代日本の教育は大きく二回の「黒船」を体験している」とあるが、本文中で「黒船」という表現は、どのように使われているか。その説明として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 第一の「黒船」は明治政府に新しい時代を開く契機を与えたペリーの艦隊を表し、第二の「黒船」は、個々の人間に日本という国家に所属する国民としての自覚をうながした外圧をたとえている。

イ 第一の「黒船」は時代の変化の契機となりまた国民としての自覚をうながした幕末のペリーの来航を表し、第二の「黒船」は第二次世界大戦後の占領軍による「民主化」がもたらした変化をたとえている。

ウ 第一の「黒船」は近代の封建身分秩序から人々を解放するきっかけとなったペリーの来航を表し、第二の「黒船」は第二次世界大戦後に「村の自治」や「宗教の自由」を奪った占領軍をたとえている。

エ 第一の「黒船」は幕藩体制を壊しかつ民権意識の高揚をもたらしたペリーの艦隊を表し、第二の「黒船」は第二次世界大戦後に「市民としての権利」を保障した改革をたとえている。

オ 第一の「黒船」は文字通り浦賀に現われたペリーに率いられた艦隊を表し、第二の「黒船」は第二次世界大戦後に教育の「民主化」をもたらしたアメリカ教育使節団をたとえている。

問二 傍線部2「立身出世」とあるが、どのような意味か。最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア 封建的な身分秩序から解放され、社会的階層を上昇すること。
- イ 新しい産業社会において、必要とされる人材となること。
- ウ 人間社会の共同性や道徳から解放され、個人として成功すること。
- エ 組織化された学校系列において、高い学歴を得ること。
- オ 国家の強制する義務を宿命とし、立派な国家官僚となること。

問三 傍線部3「かつて白装束を身にまとい、命を賭けて権力の不正と戦ったリーダーがいたことを想起しておきたい」とあるが、そのリーダーを支えていた精神とはどのようなものだったか。つぎの形式に従って、三十字以上四十字以内でまとめ、解答欄に記せ。なお、読点や記号も一字と数える。

「公」観念。

問四 本文は、大きく二つに分けられるが、前半と後半の内容を説明した文として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 前半部では日本の教育問題を明治以降の立身出世主義との関連で実証的に論じ、後半部では市民革命をへて確立した西洋の近代国家と日本を比較し、「市民としての権利」意識が確立していないがゆえのさまざまな教育問題を列挙し、教育の再生を新しい「公」観念の形成に託している。

イ 前半部では封建主義から解放された明治国家における教育について、国家による国民教育と村の教育機能との関係のもとに論じ、後半部では第二次世界大戦後のアメリカの指導による「村の自治」の破壊を理由とする教育の荒廃を嘆き、教育の再生を新しい「公」観念の形成に託している。

ウ 前半部では封建身分秩序からの解放と立身出世主義がもたらした教育問題および外国から学んだ学区制の問題を論じ、後半部では第二次世界大戦中の「私」を直接「国家」に結びつけようとした教育から、戦後の民主的教育への変化を明らかにし、教育の再生を新しい「公」観念の形成に託している。

エ 前半部では明治以降第二次世界大戦後までの日本の教育問題について立身出世主義、農村の解体、戦後民主主義の実態などを歴史的に論じ、後半部では地域から追いやられ、かつ大人の世界に侵されていく現代の子どもたちの姿を指摘し、教育の再生を新しい「公」観念の形成に託している。

オ 前半部では社会学的視点から明治期の立身の実態、第二次世界大戦後の教育改革、そして追いつめられた現代の子どもたちの姿などを論じ、後半部では視点を経済的問題に移し、大人の世界が子どもたちを支配しているさまを述べ、教育の再生を新しい「公」観念の形成に託している。

問五 つぎの各文の中から、本文の内容に合致するものを一つ選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア 戦前の日本の教育は、「市民としての義務」のみを強調し、「私」を直接に「国家」に結びつけようとするものであった。
- イ 大人の世界に存在する教育問題を再び学校のなかにとり戻し、子どもたちに「公」観念を教育する必要がある。
- ウ 金と暴力が支配する大人の世界から子どもたちの世界を守るためには、国家的な規制が必要である。
- エ 明治国家は農村の解体を進行させたが、村の教育機能や村人相互の扶助組織といった地域の力は受け継がれていた。
- オ 戦後、アメリカ教育使節団は個人の権利を何ものにも優先し、個人と「国家」を分断し、国民という意識を奪い去った。

